

# 中級クラスにおける活動「街案内」実践報告

高木伽耶子（ヴィータウタス・マグヌス大学）

kayako.takagi@vdu.lt

## 【要約】

本実践報告は、リトアニアのヴィータウタス・マグヌス大学の中級クラスで行われた『街案内』に関するクラス活動についてである。大学の日本語コースの現状やリトアニア・カウナス市の社会的背景から、中級レベルの学習者の学習意欲や卒業後の進路についての意識を強めていくことが日本語中級クラスの担うべき役割であると考え、CLILに基づいてデザインした「街案内」のクラス活動を導入した。本報告では、その過程、活動の結果、そして今後の展望について述べる。

## 1. はじめに

ヴィータウタス・マグヌス大学東アジア研究学科で日本語を学ぶ学生の多くは、コース修了後、日本語の使用機会・学習機会の欠如という問題に直面している。現在、22校の日本の大学と提携を結び、毎年4、5人の学生が一年間の日本留学を果たしているが、日本語の次のステージへと進む道は限られている。また、意欲的に取り組む学生たちは、卒業後にこの日本語学習経験をどのように生かすことができるかということを考えているものの、それについて具体的に相談したり、学んだりする機会は多くない。一方で、3年次に留学の機会を逃した学生たちのモチベーションの低下も問題となっている。1、2年次は日本への留学を最初の大きな目標に掲げ授業に取り組んできたもののそれが叶わなかった学生たちにとって、代わりとなる次の目標を見つけるのは容易ではない。また、初級後半から中級への移り変わりでもある時期であり、クラス内の日本語力の差が大きい。そして、前レベル終了時の学生からの聞き取りでは、「日本語を使って何かしたい」「文法以外のことしたい」という声が多く寄せられた。レベル1～4までは教科書に基づいた文法・会話中心のクラスであり、作文やクラス内の発表はあるが、全体的に学生にとっては受動的な授業であった。

さらに社会的背景として、リトアニアの観光業における日本語の需要は高まりつつある。ヴィータウタス・マグヌス大学のあるリトアニア第二の都市カウナスは特に、戦間期に日本人外交官・杉原千畝がユダヤ人を救った場所としても知られる場所として、日本・リトアニアの国際交流イベントを積極的に行っている。同市は2022年に欧州文化首都（European Cultural Capital）に指定されるなど、近年、ツーリズムに非常に高い関心を持っている。現在すでに日本語を使って活動しているリトアニア人ガイドたちがいるが、今後はその数や質の向上が期待されている。

このような背景から、ヴィータウタス・マグヌス大学の日本語クラス、特に最終レベルのクラスが担うべき役割は、単に日本語や日本事情を教えるだけでなく、留学帰国生を含むすべての3、4年生らに日本語学習継続の動機を与え、卒業後の日本語使用機会を具体的にイメージさせ、進学・就職へと導くことであり、そのアプローチも初級レベルのような受動的なものからより能動的で学生が積極的に

学習に参加できるものへと変えていく必要がある。その一つとして、最終レベル6の日本語クラスでは『街案内』という学期を通じた一連のクラス活動として設定し、それに合わせた授業づくりを行った。

## 2. クラス概要

本実践を行ったクラスは、ヴィータウタス・マグヌス大学アジア研究学科の選択必修科目の一つである『日本語・文化レベル6』である。日本語コースのレベルは1～6に分けられており、学部生は原則として一年次にレベル1、2（初級前半）、二年次に3、4（初級後半）、そして三年次にレベル5、6（初中級～中級前半）の授業を履修する。3年次に日本へ留学し帰国した学生や、大学院修士課程の学生らも履修が可能であり、本クラスの構成は、3年生12名、4年生6名（うち留学帰国生1名）、大学院修士1年生2名（どちらも留学帰国生）であった。

前述のような背景を受けて、レベル6の日本語のクラスの役割を以下のように設定した。

- ① 日本語を使った仕事の可能性について考えさせる。
- ② 日本語の実践的な使用場面・機会をイメージさせる。
- ③ 自分が暮らす地域の文化や歴史の価値を再確認させる。
- ④ 様々な活動を通じて能動的な日本語学習を体験させる。

これらを達成するために内容言語統合型学習（CLIL）のアプローチを用いてそれぞれのクラス活動の目標、方法、教材、内容を定めた。CLILとは「特定の内容（教科やテーマ、トピック）を、目標言語を通して学ぶことにより、内容と言語の両方を身につけていこうという教育法」と説明されている [奥野ほか、2018、p2]。CLILの特徴である4つのC、Content（内容）、Communication（言語知識・言語使用）、Cognition（思考）、Community/Culture（協学・異文化理解） [同、p6]に基づき、『街案内』の学習目標を以下のように設定した（表1）。

表 1 「街案内」活動学習目標

CLIL の概念	学習目標
Content (内容)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本とリトアニアの観光事情について知る。</li> <li>・日本とリトアニアの文化・宗教的な差異について知る。</li> </ul>
Communication (言語知識・言語使用)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建物、通り、施設など街の歴史的・文化的背景に関する語彙</li> <li>・受身表現</li> <li>・ガイドに必要な表現</li> <li>・丁寧体を使った口頭での説明</li> <li>・普通体を使った文章での説明</li> </ul>
Cognition (思考)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複数の聞き手に対しての効果的な話し方</li> <li>・自分が暮らす街の文化的・歴史的価値</li> </ul>
Community/Culture (協学・異文化理解)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスメートからの意見を聞く</li> <li>・クラスメートの作文やスピーチにコメント・質問をする</li> <li>・グループメンバーと協力しながら発表の準備をする</li> <li>・日本人学生からのアドバイスを受ける</li> <li>・日本人学生と共にリトアニアと日本の違いについて話す</li> </ul>

『街案内』の発表で、学生は大学のあるカウナス市内で日本人観光客に紹介したい場所を一つ選び、その場所について説明を行う。本物のガイドのように、実際の場所に教師とクラスメートを連れて行き、5分程度の案内を行った後、質問などに答える。また、この発表の準備と並行して同じ案内場所についてのガイドブックページを作成し、クラス全体で一冊の『カウナス案内』というガイドブックを作成する。その後、カウナス以外の都市のガイドブックをグループで一冊作成し、それについてクラス内で発表する。

### 3. 授業の流れ

授業内では『中級へ行こう』[平井、三輪、2004]の第6課から10課の内容を扱い、同時に街案内に向けて段階的に準備を進めた(表2)。

まず、第2週目から7週目までは個人発表に向けての準備をクラス内外で行った。建物や歴史についての説明でよく使われる受身表現については、2年次に学習済みであるが、「建てる」→「建設する」のように語彙の言い換えを含めながら基本的なルールを復習した。その後、芸術をテーマに受身表現を用いた短い作文とスピーチを作り、学生同士でクラスメートの作文を添削したり、スピーチ内容について質問したりする3～4人のグループ活動をクラスで行った。4週目の授業では、カウナスの見どころについてグループで案を出し合った後、一人一人が自分の案内場所を決定した。街案内の原稿作成を始める最初の段階として、その場所を説明するために重要なキーワードを10個以上書き出し英語・日本語の単語リストを作成する宿題を出した。クラスでは国内のガイドの資格を持ったリトアニア人日本語教師による街案内のデモを学生に見せ、グループごとに気づいたことや真似したいところについて話し合わせた。中間テスト後に、それぞれの下書き(第一稿)をクラスで互いに読み合い、内容についてコメントや質問を交換し合った。その後、教師が原稿をチェックし、学生に文面と口頭で

フィードバックを行った。発表の前の週に、日本人留学生をクラスへ招き、4～5人のグループ活動を行った。自己紹介等のウォーミングアップの後、学生はそれぞれ自分の案内場所について話し、日本人学生からアドバイスを受けた。

8週目は発表をエリアごとに4つのグループに分け、それぞれ実際の場所で発表を行った。学生は案内場所に着くと、ガイドとして振る舞い、説明後に教師やクラスメートからの質問に答えた。

その後、発表について教師から個人に向けたフィードバックを文面で行い、クラス内では発表の感想についてグループで話し合い、クラス全体で共有した。さらに、ガイドブック用の最終稿の校正を学生同士で行った後、教師が最終確認を行った。

11週目以降はグループ発表に向けての準備を進めた。まず、ガイドブックを作成する街を選び、それぞれがどのページを担当するか等を具体的に書いた計画書をグループごとに提出した。クラス内では教師とのコンサルテーションと他グループのガイドブックの草稿を読み、コメントを交換するという活動を行った。

最終週にグループごとに発表を行い、その後クラス全体で振り返った。

**表 2 『2018年春学期日本語・文化レベル6 授業計画』**

	話題	発表への準備	クラス活動
第1週			オリエンテーション・前レベルの復習
第2週	発明と芸術①	受身表現の復習	読解・文法練習
第3週	発明と芸術②	受身表現を使った短文・短スピーチ	ピア・リーディング、グループ内発表
第4週	環境問題とリサイクル①	案内場所決め	読解・ディスカッション
第5週	環境問題とリサイクル②	キーワード書き出し	プロの日本語ガイドによるデモンストレーション
第6週	中間テスト	下書き	い前半の復習・テストの振り返り、ピア・リーディング
第7週	コミュニケーションと誤解	作文・ガイド練習	コンサルテーション、日本人学生との会話
第8週			街案内(個人発表)
第9週	男女格差①	ガイドブックの校正	発表の振り返り、ピア・リーディング
第10週	男女格差②		特別講義
第11週	敬語とビジネス①	グループ・案内場所・役割分担決め	ディスカッション
第12週	敬語とビジネス②	下書き	コンサルテーション
第13週	総まとめ	下書き	ピア・リーディング
第14週		グループ練習	グループ発表準備
第15週			グループ発表・振り返り

#### 4. 結果・考察

クラス活動の観察、学生らの発表、ガイドブック、評価、発表に関する振り返りのコメント等を元に、ここでは『街案内』活動についての考察を行う。

まず、第2週では、受身表現に対する学生の苦手意識が目立った。文法練習の中では問題に正しく答え、正確に使えているように見えても、自身の発表原稿の中では上手く使えていない学生が多く見られた。誤りのパターンは①正しい受身形が作れない（例：作る→作られる、可能形・使役形・使役受身形と混同している）②行為者と対象の位置が逆（例：宮崎駿はこの映画に撮られた。）③助詞の誤り（例：この絵をチュルリョーニスによって描かれた。）の3つのパターンに分類された。そこで第3週目のピア・リーディングでは、ざっと全体に目を通した後、「文体（普通体になっているか）」「助詞」「受身の活用」「主語」など項目ごとに添削を行うようにしたところ、半数の学生がクラスメートの受身の間違いを指摘することができた。しかし、受身表現を使うことを意識するあまり、必要以上に使い、不自然な文章になってしまうケースも見られた。

第5週目は課題としてキーワードの書き出しをさせ、自分の選んだ案内場所に関する重要語句のリストを作成させたが、場所によって難易度が大きく異なった。例えば、学生に人気のカフェを選んだ学生は人気メニューをカタカナで書き換えることがほとんどで、それほど困難はなかったが、歴史的な建造物や教会を選んだ学生は訳語を見つけるのに苦労が多く、草稿を作るのにもかなり時間がかかった。クラス内ではオンラインで利用できる英和・和英辞書『Weblio』やヴィータウタス・マグヌス大学アジア研究センターが作成した日本語・リトアニア語オンライン辞書『NIHONGO』などを紹介したが、多くの学生がスマホアプリの無料英和・和英辞書を利用していた。歴史や宗教用語などを調べる際に役立つ文献・Web ページのリストなどの作成もクラス活動の一部に組み込むことを検討する必要がある。

個人発表では①正確さ②流暢さ（メモなどを見ない）③質問への返答④聞き手とのコミュニケーション⑤説明の工夫（写真や絵、音楽などを使う）という5つの評価基準を設けた。ほとんどの学生が③～⑤の基準を満たしていたものの、①や②では大きな差が見られた。発表後の振り返りでも、学生の多くがメモを見ずに流暢に話す、正確に話すことの難しさに言及した。「たくさん練習したけどうまく話せなかった」「単語が難しくてすぐに覚えられない」などのコメントがあった。当然ながら練習量の差は大きいと考えられるが、クラス外で飽きずに練習を繰り返し続けられるような工夫をしていく必要がある。その他、学生が挙げた難しさに関するコメントには「外で話すから大きな声で話すのが大変だった」「敬語が難しい」などがあった。ガイドがよく使う敬語表現として「ご覧ください」「ご存知ですか」などフレーズとしてクラスではいくつか取り上げ紹介したが、特別クラス活動では取り入れなかったため、このようなコメントが挙げたと考えられる。

一方、ポジティブなコメントには「緊張したけど楽しかった」「難しいけど楽しい授業だった」「日本人の友だちが来た時に使える」「ガイドの仕事やってみたい」などがあった。特に4年生と大学院生からはこのような意見が多く、反対に3年生からは難しさや大変さに関するコメントが目立った。これは、4年生と大学院生が3年生よりも卒業後の進路を強く意識しているためだと考えられる。ガイドに限定せず、より幅広い日本語を使った疑似職業体験をすることで、今後の日本語との関わり方を考える学生を増やせるのではないだろうか。

## 5. 今後の展望

今回のクラス活動で、読解練習には『中級へ行こう』の本文、『まるごと 初級2 (A2) りかい』〔国際交流基金、2014〕トピック7（第13課・14課）、及び教師が独自に作成した教材を用いたが、「日本語で読む」をより意識した質の高いインプットを目指し、実際の日本語で書かれたガイドブックや

ガイドマップなどを取り入れていくことで、学生がより実践的な日本語表現に振れることができると考えられる。

また、協学の面において、今回はディスカッションやピア・リーディングが主となっていたが、学生間の相互評価や口頭・文面におけるフィードバックも効果的に取り入れていく必要がある。それにより、教師からの評価という一つの軸にとらわれず、様々な角度からのアドバイスやコメントを得て、より客観的に自分の日本語能力やコミュニケーション能力を見つめることができる。

さらに、クラス内の学生同士によるピア・ラーニングのみではなく、日本人学生との協学の機会を増やしていくことでより高い学習効果が期待できる。今回の実践において、日本人学生は個人発表の直前に行った練習での聞き役としてクラス活動に参加し、学生にアドバイスをするという役割のみを担っていたが、活動を通じて日本人学生にも「学び」を実感できるような関わりを持てるよう工夫することで、より積極的な協力が得られると考えられる。例えば、ピア・リーディングやディスカッションを日本人留学生と共に行うことで、リトアニアの文化や歴史についての学び、意見交換により、互いに深い理解を得ることができる。また、対象を長期（一年）の留学生から短期研修の学生、及びリトアニア留学を考えている日本の提携先大学の学生のような潜在的な協力者まで拡げていくことも可能である。

最後に、今後は本活動に ICT ツールを積極的に取り入れていく予定である。活用の具体例と期待される成果として、

- 日本人学生とのコミュニケーションツールとして取り入れ、クラス内での協学に縛られず、教室外でもクラスメートや日本人学生と関わりながら学ぶ
- Google my map のようなオンライン地図アプリを使ったガイドマップを作り、より実用的な成果物を授業終了時に残す
- オンラインビデオチャットを活用し、街案内発表を不特定多数のオーディエンスに対して行い、コメントにて感想を得る

などが挙げられる。これらを実現するために、教師は学内で留学や国際交流を担当する部署や他大学との連携を進め、日本語クラスへの参加を促していくことも重要である。

## 参照文献

奥野由紀子（編著）・小林明子・佐藤礼子・元田静・渡部倫子（2018）『日本語教師のための CLIL（内容言語頭語型学習）入門』凡人社

国際交流基金（2014）『まるごと 日本のことばと文化 初級2 A2 りかい。』三修社

日本語・リトアニア語オンライン辞書<<http://nihongo.vdu.lt/index.php>>

平井悦子・三輪さち子（2004）『中級へ行こう—日本語の文型と表現 5 9』スリーエーネットワーク  
ヴィータウタス・マグヌス大学アジア研究センター<<http://asc.vdu.lt/ja/our-friends/network/>>